

この本は近代日本の歴史を一から学び直す意味を持つ  
——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』(八月書館)について

樋口健二 (ひぐち けんじ)  
報道写真家

広瀬隆氏の『日本の植民地政策とわが家の歴史』は、第1部から第3部までの44章で構成されている。私が強烈に感じたのは第1部である。その感想を述べたい。

明治維新後の明治政府は近代化を進める中で、欧米に追いつけ、追い越せの思想のもと、近隣諸国の植民地化を進め、軍国主義国家への道を突き進む。それが列強国への仲間入りと勘違いしたように、私には思えてならない。

さて、彼のエピグラフを引用させてもらうと、

「第2章から、ある日いきなり『私の曾祖父、が登場し、わが家の祖先が朝鮮で屈指の大富豪にのぼりつめ、日本の植民地政策を動かす飛車角のごとき重要な駒になってゆくのである。つまり、その富豪の家に呱々の声をあげた私自身が、日本の植民地政策の犯罪的な系譜から出た人間だという、読者が卒倒するような実話である。」

と、先祖がたどった真実を克明に表現してやまない。普通の感覚の持ち主であれば、海外で成功をおさめれば、得々と語るのがおちである。ところが、氏は国家の犯罪的行為に手を貸した点に心からの反省を込めるのである。

私は日中戦争の勃発した1937年(昭和12年)に生を受けた人間である。軍国主義の真っただ中、国民学校では皇民化教育で軍国主義をたたき込まれた。ぬきさしならぬ第二次大戦のドロ沼に突入し、やがて悲劇のトンネルを迎えて敗戦に至った。この下地を作ったのが明治の元勲などと呼ばれた政治家たちであろう。

私自身について触れたのには理由がある。戦後教育の中で、明治政府が犯した戦争の反省などほとんど語られず、いかに国造りに貢献したかを中心に教え込まれ、今日に至ったと言って良いだろう。それを翻してくれたのが本書である。私の記憶の底に浮かび上がって来たのは、黒田清隆、井上馨、山縣有朋、伊藤博文、大久保利通、福沢諭吉、桂太郎、資本家の渋沢栄一、大倉喜八郎、日清戦争で獲得した台湾で悪さをした児玉源太郎、後藤新平など、錚々たる?人物たちである。

ところがである。本を読み進むや、まったく知らされなかった彼らの恐るべき悪行が浮かび上がった。日本の初代首相となった伊藤博文内閣は清国に宣戦布告し、始まったのが「日清戦争」だったのだ。さらに、桂太郎内閣はロシアに対して宣戦布告した。それが「日露戦争」である。どちらも日本が勝利を修めたため、おぞましい現実を美談に仕立てたのである。歴史家や史実をしたためた人間たちは、いったいどこを向いていたのか、理解に苦しむ。

国家悪とも言うべき戦争が、あたかも日本が正しかったかのように歴史に刻まれたのも、又、悲劇と言えまいか! 事実にもとづいて真実を追及した広瀬氏に感謝したい。

少年時代、心に残った言葉がある。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずと言えり」の名言を遺した福沢諭吉にも触れておきたい。広瀬氏は言う。反日暴動の壬午事変後に直ぐ「日本人は重税その他、あらゆる犠牲に耐えて軍備拡張に全力をあげ、清国との戦いに備えるべきである」と、山縣有朋に同調して軍国主義を煽ったのが福沢諭吉だ。福沢の二面性が見事に浮き彫りにされていて悲しい。

もう一人、作家の司馬遼太郎についても手厳しい。日露戦争で日本軍はロシア軍に協力した中国人の首を切り落とし、殺戮の限りをつくした、この殺人戦争を賛美して、満州を植民地化した日本人の犯罪をまったく「なかった」ことにしたのが、『坂の上の雲』という小説であると断罪している。

広瀬氏が作家となった下地は、父親が文学青年だったところにある。大富豪となった祖父は、敗戦と同時に一文無しとなって日本へ帰国している。そんな記述もまた、胸を打つ。

この本は近代日本の歴史を一から学び直す意味を持つ。